

# 不知火（デコポン）の高接ぎ樹と苗樹の果実品質の違い

川 口 昭 二

(農学部附属農場)

## 目 的

不知火（デコポン）は清見と中野3号ポンカンの交配により育成された品種で他の中晩柑に比べて糖度が高く食味が優れているため栽培面積は全国的に増加している。それに対応して高接ぎ更新，新植が進んでいるが，これに伴い栽培上の問題が多く発生している，それは，果実の減酸不良であり，その中でも特に高接ぎ樹の減酸が悪いと言われている。そこで，唐湊果樹園で栽培している不知火（デコポン）の高接ぎ樹と苗樹の果実品質の違いを調査した。

## 実 験 方 法

唐湊果樹園で栽培している不知火の高接ぎ樹（高接ぎ4年生），カラタチ苗樹（7年生）からそれぞれ5樹を選び1999年11月22日，12月17日，2000年1月13日，1月24日にそれぞれ5果ずつランダムに採取し果実品質を調査した。

## 結果と考察

不知火の高接ぎ樹と苗樹の果実品質の差については，第1表および第1図に示した。以下に箇条書きにしてしめす。

- 1) 果実重はサンプリング日による差が大きい，一般的に高接ぎ樹が大きかった。
- 2) 果形指数は，数値が高いほど扁平な果実を意味し，1月13日の調査以外では，高接ぎ樹の数値が高かった。
- 3) 糖度は12月17日の調査時点では高接ぎ樹が高いが，1月の2回の調査では苗樹が若干高く，最終調査では両区とも14度まで上がった。
- 4) クエン酸は，4回の調査のすべてで高接ぎ樹が約0.1%以上高かった。
- 5) 果肉歩合は，12月17日までの調査では高接ぎ樹の数値は高いが，最終的に両区ではほとんど差はなかった。

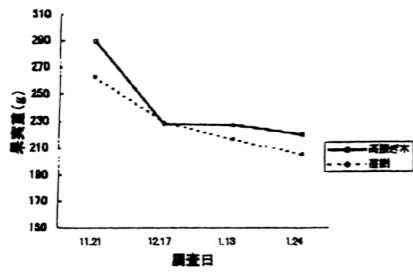
以上の調査から，高接ぎ樹が苗樹に比べて減酸が悪いことがわかったが苗樹もまだ高く，2月上旬の収穫時点での値を検討する必要がある。糖度は両区とも14度以上になり，2月上旬での収穫では15度以上と考えられる。

高接ぎ樹の減酸が悪い原因として，高接ぎした事により細根が減少し，同化養分と水分の吸収が少なくなったと考えられる。また不知火は柑橘の中では最も高い蒸散量を有しているため，夏場（8月頃）の降雨で酸に差が出るので，夏場かん水する事により減酸効果があるといわれている。

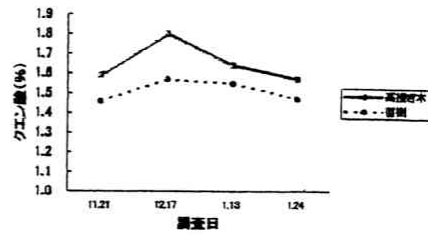
今後品質の良い不知火を栽培するには，樹勢の維持と適期に適正な管理を実施していくことが重要であるといえる。

第1表 不知火の高接ぎ樹と苗樹の果実品質の比較

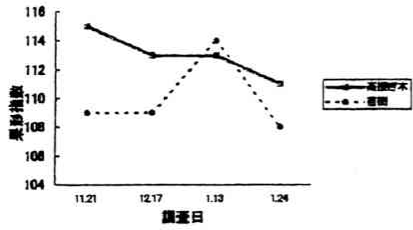
調査日	果実重(g)		果形指数(%)		糖度(%)		クエン酸(%)		果肉歩合(%)	
	高接ぎ樹	苗樹	高接ぎ樹	苗樹	高接ぎ樹	苗樹	高接ぎ樹	苗樹	高接ぎ樹	苗樹
1999・11.12	289.2	262.6	115	109	11.6	10.2	1.59	1.45	86.0	80.0
12.17	228.2	229.2	113	109	12.0	11.7	1.80	1.57	79.6	76.0
2000・1.13	228.2	217.6	113	114	13.2	13.4	1.65	1.55	78.0	79.0
1.24	221.2	206.6	111	108	14.2	14.5	1.54	1.47	73.0	74.0



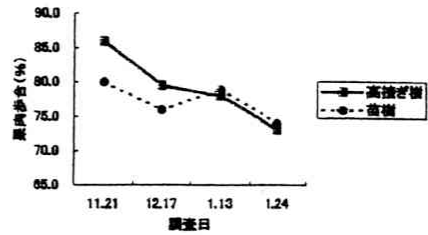
第1図 果実重の推移



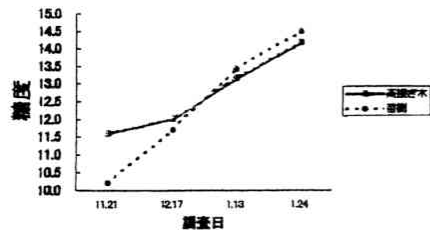
第4図 クエン酸の推移



第2図 果形指数の推移

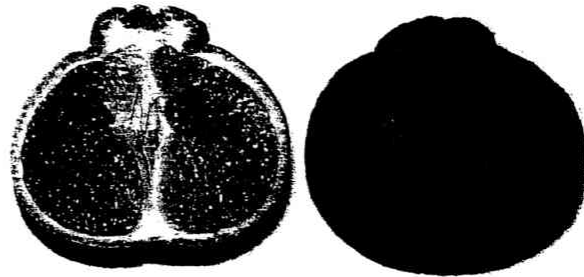


第5図 果肉歩合の推移



第3図 糖度の推移

不知火



農水省果樹試口之津支場にて（清見×ポンカン）で育成された樹勢は中位で立性だが、次代に開張し豊産性となる。

果実は約250gとなり偏円形で三宝柑様となり11月下旬には橙色に完全着色しポンカンの香りを有する。

食味は特に甘酸のバランスが良くじょうのう膜が薄く多汁で食べ易い。更に皮もむき易い為、今後、伊予柑、甘夏等からの転換品種として特に期待されている。